全国保健所長会だより

公衆衛生若手医師・医学生サマーセミナー（PHSS）2024報告

名古屋市西区保健福祉センター担当課長（医務総括）／名古屋市保健所西保健センター所長　田邊 裕

公衆衛生医師業務のさらなる見える化、深化を目指して

私は平成31年に病院から名古屋市保健所に入職する際に、多くの仲間に驚かれるとともに「保健所って何するの?」と聞かれました。「大事な仕事だから頑張ってね」という意見はごく一部の、内情を知る人からしか頂くことはありませんでした。その後のコロナ禍により、公衆衛生医師業務の重要性が注目され、今では「コロナ、大変だったね」と言われることが多いですが、このままでは何年かすると「保健所って何するの?」に戻ってしまうでしょう。一方、名古屋市保健所では私より後に入職した医師が10名を超えています。恵まれた環境でありながら、ここ数年で離職者も複数いました。優秀な人材の離職を防ぐことも大きな課題となっています。

公衆衛生医師業務は、臨床医や研究医に負けない重要性ややりがいがあります。私はこれを多くの医師・医学生にお伝えし、公衆衛生医師が進路となること、また公衆衛生医師になっている方が自信を持って業務を続けられるよう、お手伝いをしたいと考えています。

今回の「公衆衛生若手医師・医学生サマーセミナー（PHSS）」は「公衆衛生医師業務の見える化・深化」をテーマに開催しました。期間は8月17日(土)、18日(日)で、会場は例年同様東京都市センターホテルです。1か月あまりの募集期間内に定員を大きく上回る57名から申し込みがあり、最大限の調整により42名の方に参加いただきました（それでもやむを得ず15名もの方を選考外とせざるを得ず、これは今後の大きな課題となっています）。

開催直前の日向灘地震と台風7号～検討過程の見える化によりピンチをチャンスに～

8月8日16時43分ごろに日向灘で最大震度6の地震があり、宮崎県を中心に被害がありました。また、10日ごろに発生した台風7号が関東圏に上陸する見込みとなり、13日には参加予定者からも開催の可否に関する問い合わせを頂くようになりました。その後、東海道新幹線をはじめとした多くの公共交通機関の運休が決定しました。しかし、セミナー当日の17日には台風自体は関東圏を抜ける予報となりました。セミナーは人と人とのつながりをつくることが最大の魅力でもあり、現地開催の意義が非常に大きいです。運営メンバーで直前まで情報収集・検討を行い、14日夜間に「（17日の公共交通機関の乱れを見越して）2時間遅らせて現地開催する」ことを決定しました。

この検討過程をチャットツールで全参加者と共有しました。その際には、できる限り「主催者が現地で皆さんと会って話したいと考えている」ことを伝えた上で、検討過程を記載した情報を共有しました。これは私の上司の「ピンチの時こそ悩む姿や本音を共有することでまとまりが生まれ、チャンスになる」という考えを体現したものです。実際にこの過程があったことで、「何とか現地で会うことができた」という心情がスタッフ、参加者の中に生まれ、当日の盛り上がりや参加者満足度の向上につながったと考えています。そして、この考えは健康危機対応時にリーダーが方針決定するプロセスに通じるものがあり、開催前から公衆衛生医師業務の「見える化」「深化」を感じた参加者、スタッフもいたと感じています。

プログラムの内容

初日のテーマを「公衆衛生医師業務の見える化」とし、前全国保健所長会会長であり、大分県福祉保健部の内田勝彦先生による講演と、若手公衆衛生医師による「若手パワー!トーク」、プログラム終了後には自由参加型の名刺交換会を行いました。2日目はテーマを「公衆衛生医師業務の深化」とし、国立感染症研究所実地疫学専門家養成コース（FETP）研修を受けられている金沢市保健所の北岡政美先生と、映画「ぼけますから、よろしくお願いします。」の監督でありノンフィクション作家の信友直子先生からご講演をいただきました。

PHSS2024参加者とスタッフとの集合写真

■内田先生講演「保健所長の働きと可能性」

保健所長に就任されてから現在に至るまでの経験（公害案件のリスク評価と住民検診を行い地域住民に情報提供したこと、医師会とコラボした糖尿病重症化予防対策事業、保健所長会会長時の新型コロナ対応について等）を基に、保健所や保健所長の業務とやりがいについてお話しいただきました。

グループワークでは保健所がその地域の医療資源をつなぐ場であることや、そのために現場を直接見ることの重要性の気付きなどが感想として挙げられました。

■若手パワー!トーク

われわれの事業班から4人の若手公衆医師が登壇し、働き方ややりがい、ワークライフバランスや収入面に至るまで、業務の実態を伝える企画としました。昨年度までに同様の企画を行った際に上がった質問を基に内容を構成したため、参加者の満足度が非常に高く「勤務の実態を具体的に知ることができた」という声を多く頂きました。

■北岡先生講演「国立感染症研究所　FETP研修体験記」

コロナ禍で大きく注目を浴びた実地疫学の必要性といった総論から、そのトレーニングコースとしてのFETP研修についての各論までを詳しく講演していただきました。参加者からは「国を動かすようなガイドライン等の作成現場の実態を知れたことや、平時のサーベイランスの重要性を理解した」、また「EBSをどのレベルまで確認するのか」などの幅広い意見や質問がありました。

■信友先生講演「認知症の母が命懸けで教えてくれたこと」

認知症となった母、介護する父とご自身の経験をお話しいただきました。参加者からは「日本では、家族が介護していることが美談になってしまうことが印象深かった」という意見や、「認知症の方も地域で受け入れられる社会にする」「薬で治すのではなく、社会を変える」といった公衆衛生の視点からの提案もありました。信友先生が「この話をすると皆さんが自分や家族のことに置き換えて考えてくれる」とお話されたことも印象的でした。

継続的な公衆衛生医師の認知度向上を目指して

アンケートで参加者の満足度は9・2点（10点満点）と非常に高く、複数の参加者から特に「見える化」につながったという声を頂きました。臨床や研究に比べて認知度が低くなってしまう公衆衛生医師業務ですが、今後も継続的に公衆衛生医師を確保・育成していく場としてこのセミナーを持続・発展させていきたいと考えています。